

指導技術の向上を目指した授業の構想

—指導実技研究を中心とした地域貢献活動—

牛渡克之*，菊池真理子**，赤坂裕子***

*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属小学校，***岩手大学教育学部附属中学校

(平成27年3月6日受理)

1. はじめに

県内各種各校等の音楽指導に携わる立場にある人は多く、専門外の指導者が吹奏楽や器楽の指導をすることがほとんどである。授業研究会や講習会に参加したいものの、実際にそのような講座が開催されるのは稀であり、またその情報も狭い範囲だけにしか伝わらない。このことは、指導を受ける児童生徒への影響も大きく、高水準の教育を受ける機会をみすみす失っているのではないか。

このままでは音楽教育の質の低下や、県内児童生徒の音楽離れが進むおそれが懸念されるので、吹奏楽やオーケストラ等器楽指導を行っていながら指導法を学ぶ機会の少ない教師等や学生に、このプロジェクトを通して指導技術を高め、子ども達の学ぶ力を向上させたいと考えた。

2. 方法

①各地区の指導者との連携をとりながら、音楽的授業指導方法についての検討実践を重ねる。

・サウンド作り

②指導技術向上学習会をする。

・指揮法

・ジャズ即興演奏法講座

③音楽指導者学習会を行う。

3. 具体的な実践講座等

①吹奏楽指導方法～「サウンド作り」

小中学校における「サウンド作り」、いわゆる基礎合奏は、音楽の基礎教育を受けていない児童生徒にとって、ソルフェージュ力を磨き、合奏の基礎を学ぶのに大変重要である。そこで、合奏時には下記の事について注意しながら行うように実際

指導を行った。

<吹奏楽サウンド講座>

日程：6月21日（土） 9：00～

講師：牛渡克之（岩手大学准教授）

内容：小学校バンドにおけるサウンド作りを、附属小学校吹奏楽部をモデルバンドに行った。バンド教本と実際の楽曲を使い、音の合わせ方、サウンドの混ぜ方、発音の揃え方などを指導し、他の参加者と意見交換を行った。

(1) 呼吸について

高い音の方が良く聞こえて来るので低音の息が足りない時はきちんとブレスする。

タンギングを揃えるために裏拍を感じると発音が揃う。

小学生は体が小さいため、小まめにブレスを吸うことが必要である。

(2) 響き

喉の奥をしっかり開け、空気が振動するのを感じて吹くこと。

他の楽器の音を聴き、音のイメージを持って音を出そうとする事が大切である。

(3) 和音

歌うことで音程が取れる。

自分の吹いている音が和音のどの音の役割かを理解する。

②

・指揮法

指導者にとって最も習得が難しくかつ最も必要とされるのが指揮法の技術である。指揮の基礎を学び実践する。受講者自身も演奏する側の立場を

経験し、また他の受講者へのアドバイスを聴講することでより深く学ぶことが出来る。今回は、地域の指導者と児童生徒への還元を目的とするため、モデルバンドに盛岡一高吹奏楽部を起用し、県内各地の小中高教員、一般音楽指導者等が受講した。

モデルバンドのメンバーは一流の指揮者による講習を間近に見ることで、指揮に関する興味関心を引き出されることとなった。

<指揮法講習会>

日程：10月18日〈土〉午後～19日〈日〉

夕方

講師：小林恵子先生（指揮者）

演奏：盛岡第一高等学校吹奏楽部（引率・指導：櫻和幸教諭）

内容：

- 1 指揮における運動と基本図形
- 2 予備拍の重要性
- 3 スコアリーディングの目的、方法等
- 4 吹奏楽における指揮法について
- 5 その他のテクニックについて

各受講生の持つ疑問から、どのような対策が必要かを討論した。その後、指揮でやらなければならないこと、できることとは何かということについてディスカッションを行った。

また、良い音楽とはどのようなものかという個人の持つイメージに差があるので、それぞれの演奏を得意とする音楽はどのようなものかを考えた。

最後に、指揮でできることは、ブレス、テンポ、一人でできない音楽を創る、提案、ヒントなどがあるのではないかという事を、実際に振ることで確認していった。

・ジャズ講座

現在ポピュラー音楽とされているもののほとんどはルーツをたどればジャズに行き着くと言っても過言ではない。学校教育現場、一般の音楽サークル等、いかなる場面においてもジャズ奏法の最も大きな特徴である即興性について学ぶことは、

ソルフェージュ力、アンサンブル能力、音楽のスタイルを理解する上で非常に重要である。

<ジャズアドリブ講座>

日程：10月25日（土）～26日

講師：ニール・ストルネイカー先生（洗足学園大学非常勤講師）

内容：ストルネイカー先生の特徴ある指導スタイルで下記のようなジャズ即興演奏についての講義を行った。

- 1 メロディを歌い、覚え、楽器で演奏する。
- 2 ベース音を歌い、覚え、楽器で演奏し楽譜に書く。
- 3 和音の構成音を歌い、ピアノで音を取り、楽器で演奏する。

なお1～3は全て楽譜を見ずに行い課題曲は以下の7曲があらかじめ指定された。

Voyage

So What

Footprints

Blue Monk

Autumn Leaves

Mr. PC

All Blues



③指導技術向上学習会。

どのように指導するか？指導者にとっては非常に悩ましい課題であり、上達が困難な部分である。

本来は良き指揮者それ自体が良き指導者であるべきだが、対象が児童生徒であればより教育的な視点を持たなければならない。指導者がどのよう

な心がけをもって指導に臨めばよいか、指導者のもつ指導力をどの場面でどの程度児童生徒に発揮すべきなのか、演奏者のやる気を作り能力に応じた、あるいは能力以上の演奏を引き出すためにどのような言葉を使えば良いのか、そのような指導全般に関するアイデアを得るため、指揮法講習に先立って講師と受講者間で意見交換を行った。

<指導技術向上学習会>

日時：10月18日（土）午前

* 指揮法講習会のイントロダクションとして

講師：小林恵子先生（指揮者）

内容：

1＝指導者としての指揮，演奏家としての指揮の違い

- ・いずれの立場であっても的確な指揮により指示を出せなければならない。
- ・幸い指導者は何かしらの器楽奏者でもあることから、その楽器の構え、一音目を発するときの体の動きが必ず参考になる。

2＝指導者としての心構え

- ・自分の思っている音がでない，という指導者が多かったが，どんな音が鳴るべきかと頭の中であらかじめ考えられてないのではないのか？音のイメージを指揮を振り下ろす前に頭の中で作っておくことが即ち指導者の心構えである。

3＝指導者の観点からのスコアリーディング

- ・イメージを構築するために，深くスコアを読むことが大切である。

4＝時間が無い中での指導法の訓練について

- ・指導者は最低限やるべきことの優先順位を持つべきだ。あれもこれも，と欲張って時間がなくなっている部分もあるのではないか？



指揮で音を出す動作について：実技



指導する上で大切な事：理論学習



モデルバンドを使って：実際の指導

4. 考察

今回、音楽指導者が最も悩むところである、指揮法とポップス演奏法（今回はその根本をなすジャズ奏法）について講師を招き研究を行った。

①サウンド作りについては特定の方法があるわけではなく、筆者（牛渡）なりの方法論を、モデルバンドを使って実践し聴講者と意見交換を行った。指導者（＝指揮者）を伴う合奏には管弦楽、吹奏楽、金管バンド、弦楽合奏等様々な形態があるのだが、例えば吹奏楽を例に取ってもリードを使用しないフルート属、シングルリード属、ダブルリード属、リップリード属、打楽器と相違する発音体の楽器が様々あり、多くの指導者はそのいずれかの楽器の専門家であることが多いので、その合奏体の理想のイメージには各人かなりの個性があることがわかり興味深かった。どのようなサウンドを望むにせよ、指導者は言葉によってそのイメージを演奏者に伝え、また可能な限りの具体的な奏法へのアドバイスをを行わなければならないことが共通の意見として出された。

②-1 指揮法については、なぜ大規模な合奏では指揮者が必要なのか、という必要論から説き起こした。各受講者の持つ音楽の根源を引き出すようなレッスンを受けることが出来たのが収穫である。

特に講師が「エア楽器」と言う、自分が経験したことのある楽器の構えをさせ、その構えの姿勢のまま指揮を行う、という練習方法が非常に印象的で効果があった。

つまり、自分が長く携わった楽器については体が自然に動く習慣が既に身につけており、呼吸、発音のタイミング、音の強さ、音色などが目の前の演奏者にとってダイレクトに伝達出来るということである。受講者の中で、この方法が非常にうまくいき、ごく短期間で上達した人がいたが、その様子を見ていた私達全員が指揮法の奥深さ、各人の音楽人生の全てを使って行うことが指揮法なのだ、ということ学んだ。

②-2 ジャズ奏法については、通常このような講習では非常に難解な和声や音階の理論を学ぶことが多いのだが、今回の講習は徹頭徹尾「耳を使っ

た」ことがユニークで有意義であった。集まった受講生は可能な限り楽器を持参し、まず最初に極めて容易なリズムと数音を使ってアドリブ（即興演奏）を行った。リズムやフレーズのルールさえあれば、楽器の習熟とあまり関係なくアドリブ奏法は出来るのだ、ということを感じた。

課題曲を学ぶ際も、「なるべく事前に楽譜を読まないで参加するように」という指示があり、その場で音源等を聴いて口ずさめるようになることを求められた。歌えるようになる、ということで音楽のかなりの部分が身体に入り、すぐに楽器で演奏出来るようになることが驚きであった。

まず読譜ありきで、その読解能力が試されるクラシック音楽の学習とは大きく違う点である。

またアドリブの際は「感覚の自由さ」が必要だと言うことが強調され、たとえばバラバラのアルファベットから英単語を発見するなど、時折頭脳ゲームのようなものを受講生に与えていたが、講師によると「より右脳を使う活動が有効」とのことであった。アドリブの際は、感情を表し、ストーリーを音で説明するなど、単なる音の羅列で終わらないようにと強調していた。

③指導技術向上については、受講者全員が何らかの形で指導に携わる人間だったので、大変真摯な意見交換ができ、講師の適切なアドバイスを得ることが出来た。

今回のケースではほぼ全員が吹奏楽関連の指導者であったので、大人数のアンサンブルをまとめる、というところに問題点を感じる意見が多く出された。結局のところ、生徒の技術程度、アンサンブル能力と指導者側の指示能力とでどうバランスを取るか、ということが重要と感じた。講師からは、たとえ児童生徒の技術程度が低かったとしても、それでも指揮による指導者の指示の巧拙で多少の音楽の違いは出てしまう。良い指導者であるためにも指揮による指示は的確であるべきだ、というアドバイスが出され非常に共感するところであった。

5. まとめ

極めて有意義な講習と研究が行われたことにまずは満足して良いと思うが、以下のような反省点もあった。

まず、①サウンド作りと②-1 指揮法については、その響きの違いを体感するために、より広い空間、出来るだけ音楽専用ホールで行うことが必要であるということだ。また一概に合奏体のサウンド、合奏体に対する指揮法といっても、そこには様々な合奏の種類が存在するわけで、部活の延長である吹奏楽をモデルに行ったことは適切であったか？という反省が残る。

②-2 ジャズ奏法講習については、受講者は元々ジャズに興味があり日常的にジャズを演奏する人達が多かったが、むしろクラシックを学んだ人がジャズを体験するための入口になった方が良かったのではないかと思われる。

③指導技術向上については、職業的指揮者からみた指導技術という観点でアドバイスがあったが、学校教育現場で指導を行うハイレベルな指導者の意見も聞いてみたいという感想も受講者から寄せられた。

以上のような反省点を今後の研究に活かし、岩手県においてより多くの素晴らしい指導者が増えていくように、またその養成のための機会を作っていく地域に貢献したいと思う。

謝辞

まず大変丁寧な講習を行って頂いた、小林恵子、ニール・ストルネイカー (Neil Stalnaker) 両先生に御礼を申し上げます。またモデルバンドとして参加して頂いた、盛岡一高吹奏楽部と引率の櫻和幸先生にも御礼申し上げます。

各講習に参加していただいた受講生の皆様にも、貴重なご意見を頂き感謝致します。

参考文献

- 1) 「指揮法教程」(斎藤秀雄) 音楽の友社

